

## コスモポリタン育成のための視点

近藤文代

システム情報工学研究科講師

8月に出席した国際会議に加え、オリンピック、特に日本人が沢山のメダルを取ったことは本稿を書くにあたっての絶好の題材を与えてくれた。「世界に通じる」、「戦略」の2つのキーワードが国際会議、オリンピックにそのままあてはまるからである。最後のキーワード、「学生を育てる」は教育経験およびITを使った新しい指導方法から導き出されよう。

### 1. 世界の潮流をつかむ能力

まず、国際会議の朝食付の基調講演で得たヒントは「潮流をつかむ」能力を養うことである。「コンピュータや情報産業でのこれまでに潮流は何か」と講演者の問いかけがあった。「速い、小さい、安い」ことに関してこの業界では現象となってきた。しかし、「これからの潮流の本質はなんだろうか？ヒューレットパッカードがカードサイズのコンピュータを作ったが、入力

はキースティックで行うそうだ。それは売れるだろうか？...」「それは売れないだろう」と会場の誰もが思ったにちがいない。「速い、小さい、安い」は、現象でしかなく、人々が望むものから派生する潮流ではない。「convenience」とつぶやく小さい声もあった。答えは“easy access to information”である。携帯電話はその良い例である。この基調講演で得られたヒントから、「世界に通じる学生を育てるための戦略」その第一要素として、「世界の潮流をつかむ能力を持った学生に育てよう」というスローガンを筑波大学として掲げよう。

### 2. 英語を使う機会の提供

世界の潮流をつかむにはグローバルな情報収集や意思決定の際に必要な言語能力が戦術的に必要である。オリンピック選手は英語ができなくても、世界に通用する技術をもっていればよい。しかし、アカデミッ

クの世界ではそうはいかない。そこで、使える英語を学ぶ機会を学生に与える必要がある。つまり、英語を使う場所を提供しなければならぬ。日本人の英会話能力は他国人に比べて劣っているといわれている。英語を使うというモチベーションを高め、実際に英語を使う場面を多くしよう。

### 3. 協働できる能力

アテネオリンピックを最初にテレビで見たときはアメリカにおり、アメリカ選手のオリンピックの成績やインタビューばかりを見続けることとなった。その中で興味をひいたのは、アメリカの女子体操のチームが銀メダル獲得は“team spirit”という戦略をとった結果であるという報道であった。ルーマニアの女子体操は世界的にその実績が認められているが、選手が小さい頃から共同の生活をしており、“team spirit”がその強さの源であるとの解説があった。同様にアメリカの水泳男子リレーでもメダルを取れたのは“team spirit”であるとの解説があった。

奇しくも、日本に帰ってきてから、日本の男子体操団体で金メダルを、また、水泳男子ではメドレーリレーで銅メダルに輝いたのであるが、その中のインタビューで印象的だったのは「アテネの空に日の丸を掲げよう」というアテネオリンピックでのス

ローガンであった。練習や本番で辛いときなどそれが頭の隅にあり、頑張れたそうである。世界のトップにある人は常に限界に挑戦するのが宿命であり、孤独である。それに耐える力を与えてくれるのが「チームとしての精神」である。つまり、個人的な不安も「チームとしての精神」は解消してくれるのである。戦略の第三要素として「チームとしての精神」を挙げよう。ビジネスの世界ではメーカーや流通間での「協働」など、“collaboration”という言葉が最近良く使われる。これは明らかに自分ひとりであるよりは誰かと上手に「協働」することにより、より成功を取めることができることを示唆している。「チームとしての精神」を培う、つまり、学生に「適切な協力者を探し、明確な目標を立て、そして協働で達成すること」を教えることは意義のあることであろう。これは実習などを通して教えることが有効であると思われる。

### 4. 基本をきっちり教えること

今回、日本の男子体操団体で金メダルを取れたのは基本をきっちり教え込んでいるからであると新聞の記述があった。ルールや種目が変わっても、基本さえしっかりしていればどんなに状況が変化しても対応できるということである。世の中が目まぐるしく変化し、知識がすぐに陳腐化する時

代において、「寿命の長い知識をきちんと教えること」が非常に大切である。戦略の第四要素として、「基本をきっちり押さえたカリキュラムで、しっかり教えよう」を掲げたい。これまでの筑波大学での4,5年の教員生活の間で学生から聞いたことではあるが、学生は異なる科目で、同じような時期に、同じような内容の授業を学んだ経験があるとのことである。同じ内容を複数回指導されれば効率が悪く、深いレベルまで習熟しないうちに学期が終わってしまうこととなる。各クラス間でシナジー効果が生まれるように有機的にカリキュラムを編成し、教育水準を高めることが必要であろう。また、学部のある科目のレベルに到達していなければ大学院生でも、レベルに応じて学部の授業をとるようにしてはどうかと思う。私自身、修士課程で分野を変えたので、学部の授業を2科目とったが、今でもそれは正しい教育方法を受けたと感じている。

## 5. 学生の育つ力を引き伸ばすための教育環境の整備

「育てる」ための戦略として「学生の育つ力を引き伸ばそう」というのが戦略の第五要素である。私の個人的な育児体験の中で得たものは、「手を掛けない方が子供は育つ」というものであった。子供は自分でや

るしかない場合に、自分で育つのである。しかし、その時に必要なものは良い教育環境である。昨今のIT技術、特にTV電話を駆使して、学生が勉強したいときに勉強できる教育環境を作ることが必要になってくるであろう。NOVAなどでは、英語、算数、PCスクールではコンピュータの授業を現実にはTV電話を使って行っている。大学入学後の基礎的な勉強はこのようなシステムにより、システムティックに行えば、労働集約的な教育から、資本集約的な効率的な教育に抜け出せるであろう。そして、特に重要な部分のみを教員が教えることにすればよいことになる。

## 6. 市場機会の利用

最後に、私は授業でマーケティングサイエンスを教えているのであるが、マーケティング的に考えた場合、欠かしてはならないのは市場機会の分析、SWOT分析である。SWOT分析とは strength(強み)、weakness(弱み)、opportunity(機会)、threat(脅威)の頭文字をとったものである。まず、筑波大学の強み、弱みを考える。つぎに、これらに、(1) 独立法人化、(2) つくば新線開通、(3) 3年次終了後、4年次より大学院進学という「機会」と、競合大学からの「脅威」を加えて、上記の戦略要素を考えあわせ、「世界に通じる学生を育てるための戦略」として完

成する。

つくば新線開通により、平成18年度より筑波大学は明らかに都内の私立大学と競合するようになることが挙げられよう。秋葉原から1時間強で来られる筑波大学は今のところ、学費は私立大学より安い。そうすると、これは「強み」になり、良い資質を持った学生が沢山来るようになり、基本をきっちり教えることにより研究者として世界に通用する学生に育つようになるかもしれない。また、つくば新線開通時には各企業による様々な広告が流れるであろうから、その際に大きなプロジェクトを打ち上げれば、シナジー効果により、筑波大学の宣伝効果はかなり大きくなるであろう。

独立法人化という面で、授業料の値上げをしなければならない状況が生まれれば、私立大学と十分競争できるように建物は冷房設備が完備している立派な建物が必要になり、経費がよけいにかかるようになるかもしれない。

4年次より大学院博士課程進学ということで、その最初の一年次に交換留学という制度を設ければ、かなりの英語能力が養われ、国際的なセンスのある学生が早い時点で育つのはいうまでもない。もともと最優秀な学生であり、博士論文を書くにしても、英語能力があり、他の学生より広い経験をもつのであるから、良い論文が書ける可能

性が大きくなる。学生個人やその親にしてみれば、1年間分、費用と時間が浮いたのであるから、早く卒業するより、より能力を高める方が良いと考えるであろう。

以上、世界に通じる学生を育てるための要素をまとめると、次のようになる：(1) 世界の潮流をつかむ能力、(2) 英語を使う機会の提供、(3) 協働できる能力の育成、(4) 基本をきっちり教えること、(5) 学生の育つ力を引き伸ばすための教育環境の整備、(6) 市場機会の利用。

これらの要素を総合的に考えた場合、一つの具体案として、4年次より大学院博士課程へ進学した学生が初年度に利用できる交換留学という制度を設ける案が考えられる。また、筑波大学の強み、弱みについては上記ではあまり考慮されていないが、この要素を加えれば、さらにより良い選択肢が考案されるであろうから、本テーマに関するアイディアはこのくらいにして本稿を終えたいと思う。

(こんどう ふみよ/計量ファイナンス・マネジメント)